

《特別寄稿》

かし
み

榿の木は観てきた

二十八世住職のあゆみ

法蔵寺筆頭総代 大島 茂

『心は形を求め、
形は心を勧める』という。

七堂伽藍と壮大な規模であった法蔵寺が、格式の高い寺院のみに許される赤門だけを残して灰燼に帰したのは慶応四年（一八六四年）の戊辰戦争・「今市の戦い」の際、土佐藩兵の焼き討ちによるものであった。

当時の住職は、失意のうちに亡くなり、しばらくの間無住の状態にあったという。その被害は、菩提寺にとどまらず、激しい攻防の戦場となった当山の檀家が多い豊岡村、藤原地区にも及び、多くのものを失った上、同年五月一日、

所野の焼き討ちを皮切りに、高百、小百、原宿、栗原、大桑、柄倉、小佐越。六、七月には大原、藤原、高原までも焼き討ちが及んだ。特に悲惨を極めたのは大桑集落で六十四軒中六十軒が焼失されたという。同所の古老の話ではその復興は昭和の初期までかかったと聞く。その上、太平洋戦争では、釣鐘まで供出させられ、寺院の復興には厳しい歳月が流れた。

そして、平成元年二十八世住職の晋山。それは、「私の代で戊辰以前の形までに限りなくそれに近い寺院までに復興させたい」との決意を秘めた就任であった。

しかし、宮大工の手によるという寺院独特の建造物の建築費は、民間のそれとは桁違い、お寺だけの運営資金だけでは到底足りず、檀家、信徒の皆様方に応分の勧進をお願いしなければならぬ。

鐘楼、客殿、伽藍堂、庫裡、境内整備等々、建築計画が進む中「もっと歳月を執った方が・・」との意見も出る。

だが、住職としての自分に行うことができることは、建築工事実施に間を執ったり、小型の堂宇建設などは、篤信者の自主勧進でお願ひしたり、家族の者にも負担させる等々費用の分散を図ることくらいのこと。

菩提寺のこととは申せ、負担をお願いする檀家、信徒の方々の負担や心情を考えると夜も眠れないほどの心の葛藤が続く。

そして、三十年。少子化の時代に対応した法要の形を提案すべく近年、永代供養の「法和殿」「慈恩堂」等も自前で新設している。

おかげで雅楽演奏会等に訪れる他地区の方々は「こんなに寺容の整ったお寺さんが、地方にもあるんですね。佇むだけで心が洗われるようです」とおっしゃられる方、また境内を散策される方々にも出会う。

焼き討ちの際、大やけどを負いながらも生き永らえた本堂脇の榿の木は、以後一五〇有余年の菩提寺・法蔵寺の歴史を観てきた。



生き残った榿の木

『かたちは心を勧める』

幾多の困難を乗り越え菩提寺の復興を成し遂げ、この度退任される二十八世・善生上人を、私たちは心からの敬意と謝意をもって送りたい。